

# 学校点描

三寒四温というには、あまりにも強風と大雪が続いた日々でした。校地内の木々も折れてしまっています。

《K中学校》

NO.21 R3. 2. 24

担当：校長

卒業式は、新型コロナウイルス感染症対策をとりながら、できるだけ短縮して人数制限もして行うということが文科省から通知が出て、さらにY県教育委員会やK町教育委員会からも指示が出されています。町教委の文書の最後の項目には、『各校が工夫し、卒業生、その保護者等にとって思い出に残る式典を実施していただきたい。』とありました。今、全職員で次第を考えているところです。

報告が遅くなったことを一つ。昨年12月4日に、本校のPTA母親委員会が呼びかけて集めた、不要となったランドセルや制服、ジャージ、ズックの寄付品のうち、ランドセルをT母親委員長さんから太陽生命に寄贈を致しました。このランドセルはアフガニスタンに贈られるそうです。アフガニスタンの子どもたちは、家から10キロ以上離れた青空教室に教科書やノートを布に包んで通っているそうです。送られたランドセルは机代わりにもなり、単に便利になるだけでなく、学校に通うきっかけにもなっているということです。K町で過ごしたランドセルは、アフガニスタンの子どもの夢に一躍買うことでしょうか。ご報告が遅くなりましたこと申し訳ございませんでした。

## 「みんな」は遠い

新聞では、今年の教員採用試験の倍率が2.2倍と前年度よりもさらに下がったと伝えていました。今の大学生には、教師という職業は“ブラックな職業”と見られて、魅力のないものに映っているようです。

わたしは、教師という職業は本当に重責ですが決して魅力のない仕事とは思っていません。それどころか、現実に悩みながら生徒と向き合っている先生には、ありったけの敬意と共感を示したいと思っています。と、同時に、学校生活をうまくやっつけられない生徒の気持ちは人間らしいと思っています。もしも、彼らが落ち込んでいるのなら「学校がすべてなんて思わない方がいいんだよ。」と肩をたたいてやりたいとも思っています。

学校に心の居場所を作ろうとする教師の姿勢を大切にしたいし、学校に生きづらさを感じている生徒のことも尊重したい、わたしは矛盾しているんです。この考え方は身勝手だし、格好をつけているだけかもしれません。それでも、その矛盾があるからこそ、教師も生徒も、悩み、そして育つ学校を目指したいと思っています。

このたよりのNO16で紹介した『スチューデント・サポーター養成講座』は、もう7回目を迎えました。その間、ストレスの対処法やエゴグラムという自己理解の手法について、そして、ただ“聞く”とは違う“傾聴”の仕方やPA（プロジェクトアドベンチャー）による集団を通じた個人の成長のあり方についてのテーマで多彩な講師の先生からの講義が受講生徒に行われてきました。今回から残り3回は、本校の職員で、生徒の目にはつきにくいけれど、縁の下の力持ちとなって働いている職員からのお話を聞いてもらうことになっています。

7回目の今日はスクール・サポートスタッフのOさんに先生をお願いして話をしてもらいました。20歳という、生徒に一番近い年齢の彼女が話すタイトルは『「生きづらい」と向き合う』で

した。全て手作りのイラスト入り冊子を全員分作って、それを使って話をしてくれました。

最初に、0さんは、『発達障がい』について説明しました。そして、実は自分はグレーゾーンと診断されたこと、またHSP(ハイリー・センシティブ・パーソン)という気質も持っていることなどを真剣に生徒たちに話してくれます。

0さんは語ります。「高校時代の修学旅行の時にみんなと集団で行動することがとても嫌で、苦痛でした。その後、お母さんに相談して、病院で検査を受けました。そして、発達障がいのグレーゾーンという診断を受けました。でも、もやもやしている心は変わりません。その後、学校を休みがちになりました。」

自分のことについて現実と向き合って正直に生徒に語る0さん。こんな風に彼女を変えたものは何だったのでしょ。是非、保護者の方にも聞いてほしいと強く思いました。

「私は、他のみんなから見ると、“頭がおかしい人”だったり“目立ちたがり”だったり、“変わっている人”と誤解されやすい人でした。周りの大人の方はすぐに「気にするな」って言うけれど、その言葉が一番つらかったです。」

クラスのみんななどのおしゃべりや笑い声の中でも、「ここでいっしょに笑っているのかな？」と思ってしまう、そんな中高生時代を過ごしたお話です。

みんなって言う言葉は誰もが簡単に使うけど、生きづらさを抱えている人にとって、「みんな」は遠いんです。

「そんなわたしを変えてくれたのは、この学校で同じように生きづらさを抱えていたある生徒と出会ったことでした。ある日、保健室で自分の感情を抑えられずに泣いているその生徒を見たとき、そしてその生徒の気持ちを安定させようと一生懸命そばで話を聞いている先生を見たとき、『あ、わたしもそうだった』って思ったんです。そして何も隠さずに、生きていこうって」

「そりゃ苦しいよね」って、大人も子どもも言い合えた時にしか生まれない話がここにありました。

きりとり

ご意見・ご感想をお願いします。

メールでご意見をいただいても構いません。 [Shinyatk1616n@yahoo.co.jp](mailto:Shinyatk1616n@yahoo.co.jp)

